いしづち

2015.11

No.107

公益社団法人 愛媛県建築士会

http://www.ehime-shikai.com

故きをたずねて　石手寺　二王門と三重塔

竹のはなし　竹の伐りどき　(1)

夢・現　かいだん・階段

ISHIZUCHI
Ehimeken kenchikushikai
2015 11
NOVEMBER No.107

CONTENTS

1 故きをたずねて 第3回 石手寺 二王門と三重塔（松山市石手）
文化財・まちづくり委員会委員長 花岡 直樹 ……①

2 自然と家とにんげんと
和紙から想うこと・・・ 今 治 支 部 橋詰 飛香 ……②

3 竹のはなし 竹の伐りどき（1） 山 田 竹 材 山田 清昭 ……③

4 しつらひ 第七回 『しつらひ』の風景（1） 松 山 支 部 東 優 ……④

5 光のはなし 「光ファイバーの照明」 宮 地 電 機 ㈱ 田部 泉 ……⑤

6 夢・現 かいだん・階段 松 山 支 部 玉乃井公和 ……⑥

7 委員会報告 牛の峰地蔵尊 文化財調査 文化財・まちづくり委員会副委員長 若松 一心 ……⑧
「雨いえ」「雨にわ」「雨まち」づくり 松 山 支 部 近藤 岳志 ……⑫

8 けんちくの輪 私の思い出と今 松 山 支 部 河野 行信 ……⑬
まちづくりに参加して 松 山 支 部 永井 由起 ……⑭

9 支部報告（建築士の日の行事報告）
紙まつりバザー 四国中央支部 ……⑮
家づくりなんでも無料相談 新居浜支部・西条支部 ……⑯
丹原七夕祭 in 耐震診断・耐震改修アピール活動 周 桑 支 部 ……⑰
夏彩祭 in 耐震診断・耐震改修アピール活動 周 桑 支 部 ……⑱
おかしのまちをつくろう！ 今 治 支 部 ……⑲
建築巡礼 in まつやまⅦ 松 山 支 部 ……⑳
市民と建築士が連携し安全・安心なまちづくり 伊 予 支 部 ……㉑
耐震診断・耐震補強啓発活動 大 洲 支 部 ……㉒
無料建築相談、「建築士の日」街頭アピール団扇配り、ゲーム大会
八 幡 浜 支 部 ……㉓
西予ジオパーク研修会（“山”の部） 西 予 支 部 ……㉔
2015 夢のまち・素敵なまち絵画展 宇 和 島 支 部 ……㉕

10 事務局報告 第３回理事会報告（概要報告） ……㉖
山田きよ版画展・編集後記 ……㉙

※ 尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。

版画
題：道後暮色
山田 きよ
［表紙の版画について］
この画を描くときに、初めてこの向きが正面入り口だったことを知った。その証拠が振鷺閣上に立つ白鷺がこちらを向いている。
国の重要文化財指定後、耐震工事が待たれているが、現状の景観や意匠を残し違和感のない修復がどう施されるのか、気になるところである。
暮れゆく道後温泉本館…
2005 年の作品。

表紙作者 山田 きよ プロフィール

1959 喜多郡五十崎町（現内子町）に生まれる
1980 松山デザイン専門学校卒業
1982 広告デザイン会社を退社し、家業の竹材業に就く
1988 独学で切りぬき手法のシルクスクリーン版画を初制作以後、内子町内子座や大凧合戦のポスターを手がける
1993 初の個展
2003 愛媛県文化協会奨励賞
2012 個展回数が 100 回となる

（本名 山田 清昭 内子町在住）

第３回　石手寺　二王門と三重塔（松山市石手）

文化財・まちづくり委員会　委員長　花岡　直樹

石手寺は松山城の東方に位置し、四国霊場第 51 番札所として松山市民だけではなく、多くの遍路や観光客にも親しまれています。寺伝によると聖武天皇の神亀５年 (728) の勅願により創建されたと伝えられています。中世の本堂、塔、門、鐘楼、鎮守社が揃って残る、珍しく貴重なお寺です。

まず二王門を紹介します。鎌倉後期の建築で、国宝に指定されていて、少し難しい表現ですが形式は「三間一戸の楼門」です。屋根は軒の出も大きく、隅はきれいに反り上がっています。とても軽快な感じがしますし、全体のプロポーションもすばらしい限りです。昔から「大工と雀は軒で鳴く (泣く)」と言われますが、軒の出のバランス、綺麗に反らせるということについては苦労が多かったと思います。その分腕の見せ所だったかもしれません。

一重の柱の頂部をつなぐ頭貫 (かしらぬき) の中央には蟇股 (かえるまた) が乗っています。これは肩がキュッと張り、上部の方が厚くなっていて、鎌倉期の特徴をよく備えた傑作との名声を博しています。

次は二王門から本堂へ向かう軸線の右手に建つ三重塔です。奈良や京都に行くとたくさんの仏塔が残っていますが、愛媛県下には三重塔が３棟残されているだけです。そのうち石手寺のものは、鎌倉後期の創建と最も古く、国の重要文化財に指定されています。他の２棟は興願寺（四国中央市三島）と興隆寺（西条市丹原町）にあり、ともに江戸期のもので県指定の文化財です。

仏塔は、古代インドで仏舎利（釈迦の骨を意味する）を祀ったストゥーバ（墳墓）が中国に伝わり、中国の楼閣建築と合体して多重塔の形式が確立したと考えられています。これが朝鮮半島を経て日本に伝来し、寺院の伽藍を構成する中心の建物として、飛鳥時代以降数多く建築されるようになりました。

屋根の上に突出した「相輪」を支持するために、必ず芯柱が建物の中心に立っています。石手寺の場合は一重の天井裏で止まっていますが、古いものでは地上まで達しているもの、法隆寺のように穴を掘って深く埋められているものもあります。この相輪は仏教では「塔婆」に当たるもので、ストゥーバ→トウバとなったのかも知れません。これが西洋に行くとタワーなのでしょうか。

今建てると１層１億円かかる、とまで言われているくらい手間と時間のかかる建物ですが、空間として使えるのは一重のわずかな面積のみ。次第に仏像を安置する金堂や本堂に主役の座を譲っていったのは、自然な流れだったかも知れません。ちなみに今、塔を新築する際、建築確認申請上は「建築物」ではなく「工作物」扱いになります。

二王門（内側より見る）

三重塔（全景）

相輪

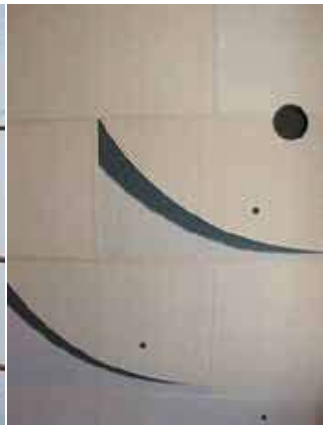
和紙から想うこと・・・

今治支部　橋詰　飛香

肌寒くなるこの季節が近づいて来ると、数百枚単位で手漉き和紙職人から和紙を直接購入します。この時期にというのは古式製法での寒漉きの和紙を求める為。直接購入は問屋さんを通すと具体的な製法や使っている原料が見えてこないのと、職人さんに直接お金を落としたいという想いがあってのこと。

手漉き和紙と言ってもその製法の多くは省力化されているのが現状です。トロロアオイの根を用いたネリでは、夏場に腐敗がし易い為に防腐剤や化学ネリが使われます。また煮熟には苛性ソーダを使用し原料にはパルプが混ぜられ、自然本来の色合いの生成りだって生成り色の染料が使われる現状に、果たしてどれほどの人が伝統的な和紙に触れる機会があるでしょう。

伝統的な和紙は楮の繊維が艶を放って輝き繊維一本一本が生きているのがよく分かります。この生きているという事が和紙を強靱にさせ長い使用に美しく耐えるものとしていくのです。素材を殺さず生かす事でその持ち味を最大限に引き出すという事をしてきたのが先人たちであり、ここ和紙でも感じるところ。この一つ一つの「生かす」という行為、その精神的な美しさが、目に見えるもの以上に住まいには映し出されていくのです。



（伝統的な古式製法での和紙。そこからは無限の世界がひろがる）

野趣溢れる木と土の家に和紙がはいり込むと、途端に滑らかで清潔感のある凛とした空気が漂い始めます。汚れを払い清めるかのような空気感。それは手も凍る寒の時期に透き通るような清水で漉かれ、まっ白な紙を目指し職人が忍耐と根気で丹念にチリを取っていくからこそ生まれたもの。漂白剤による白さとはどこか深部で異なるものがあると・・。

しかし今の時代、消えかけようとする貴重な物づくりをする職人にとって現状は厳しいです。問屋の仕組みは流通の手段がなかった時代には便利ではあったけれど今やベストな販売手段ではないと感じます。問屋さんを通すが為に高嶺の花の様になってしまう。特に貴重さが謳われる品となるとそれが顕著で、広がる物も広がらないと見ます。個々の職人の原料や製法へのこだわりが見えてこない・・。農協を通せば農薬を使った野菜もこだわりの無農薬野菜も同じ扱いを受ける様に、手間暇かけた物より見た目ばかりが綺麗な毒薬使用の安い物が好まれるという変な時代。時代に逆らいながらもこだわりを持って物づくりをする職人達の想いを同時に届けなければ、何も伝わらないし何も変わっていかないと思うのです。それはどの職種にも言える事かもしれません。

生産者（職人）と消費者（現場や施主）が離れてしまえば問題を共有できません。現場からの要望や職人の抱える問題を互いが知り得ないことはその道の先を狭める事であります。余剰に出てくる素材の使い道や今後の和紙の可能性も、互いが距離の近い関係であってこそ生まれるものであるから。

私も時折、職人の工房を訪ね楮畑の草刈の手伝いをしたり作業の様子を伺ったりしながら、彼らが今何を考え苦悩し歩もうとしているかを伺います。そして自分の事のように想います。実はそういった対話が一番建築の楽しいところではないかと思うところ。一緒に問題を語らい未来を想う、それこそが宝石の原石でも探すような作業であるから・・。既に加工された素材や商品を上手に並べ立てたところでそれを満足と呼べるのか・・。

建築はあらゆる職人の支えによって成り立ちます。特に昔ながらの家づくりは消えいこうとしている手仕事の世界が多く、今対話が問われています。彼らがいなければ、この家づくりは無くなってしまう・・そして手仕事の世界も・・。

彼らの仕事は常に無限の可能性を秘めているといつも思います。表具師さんが無地の和紙をその貼り方ひとつで襖一枚をも表現豊かな建具に変えてしまう事に、とてもワクワクさせられるのです。どんなにメーカーが数多くの商品を掲載しても『無限大』を可能にすることは出来ないし、それこそが職人達の手を通す事によって生まれる『つくる』という現場の最大の魅力であるはず。彼らを生かしていく場こそが今問われているのでは・・。

先人達の様に生かして育んでいくこと、そこから何かが生まれるような気がします。

それが私の役目であり、私の建築なのだと思うのです。きっと、生かす事で生かされる。そう、私もこの家づくりによって生かされている身だから・・。

竹の伐りどき　（1）

山田竹材　山田　清昭

作業場の電話が鳴り、竹の注文と思い受話器を取ると「今、竹を伐っても虫が入りませんか？」と、よくある問い合わせの電話である。「竹の伐りどき」、毎年頭を悩まされる案件なのである。

竹には相当量の多糖類が検出されているのは周知の事実であり、その甘い成分を育成する地下茎の発育旺盛な時期が、春から夏にかけてである。この時期の竹は、甘味性が強いことにより虫が好むことになる。（特にモウソウチクは竹の中では一番甘いといわれる）

では、年間でいつ頃が伐採に適しているのかというと、竹が発育を終えようとする９月から 12 月が好季節とされている。また、加工においては 11 月の竹が、材質がしまっていて工作上最も使いやすいといわれている。私の経験上からすれば、８月中旬から 11 月いっぱいが伐採の最適期である。

竹の需要が多かった時代、春伐りの竹は防虫加工を施して製品化していたのだが、薬害の問題も生じて防虫対策は困難を極めた。

他に、適期以外の時期はまったく伐れないのか？というと、そうでもない。

暦をみると「大つち」「小つち」という日があり、一般に「つち入りどきに伐った竹は虫が入る」というそれである。

「大つち」の日から８日目に「小つち」があり、この「大つち」「小つち」の期間は、昔から竹を伐ってはならない時期となっていて、これは木材にもいえることである。

だが、期間はその間だけではとどまらない。

「大つち」の日から７日遡ると「八せん終り」がある。一方の「小つち」は、過ぎること６日目に「十方ぐれ入り」がある。

すなわち、「八せん終り」の日から「大つち」「小つち」を過ぎ、「十方ぐれ入り」までの 22 日間、この期間がいわゆる「虫が入る」期間であり、そして「十方ぐれ入り」を過ぎて次の「八せん終り」前日までの 38 日間が「虫が入らない」時期となる。伐りどきの可否が、およそ５週間と３週間とが交互に繰り返されているのである。

伐りどきを年間通して考慮したい場合は、以上のことを注意しながら暦をみればよいが、堅実さを求めるならばやはり秋だろう。

ところがである。近年の地球温暖化に伴う環境異変は、竹や害虫の異常な生育と繁殖をもたらし、一昔前では考えられない状況を目の当たりにすることがある。

こうした中、前述のことを守ったからといっても100%安全とは断言できない。

自然の摂理や先人から伝えられている常識が、環境により崩壊し始めている。竹と共に生きている私は、それをボンヤリとみているだけなのだが…。

第七回
『しつらひ』の風景（1）

松山支部　東　　優

『しつらひ』には、“エコ”とか“性能”や“効率”とはまた違う、ひとのこころと深く関わる“うるおい”や“感動”といった、役割があります。残念なことに、最近少なくなっている和室の『しつらひ』、襖紙や畳縁などの装飾性について。

襖紙。版木で一枚一枚の手仕事で刷られた襖紙はなんとも綺麗。実家の襖の写真です。京都に暮らしていた父の好みで、唐長さんの唐紙が貼られています。

雲母のキラめき。明るさを抑えた部屋に、一面の梅が浮かびます。古典であり、モダン。大胆。文字通り“花”の“華”があります。時を経て変わらない美、時を経てさらに深まる美がそこにありました。

和紙は年月を重ね、地の紙色は濃い茶色にしっとり進化します。明かりに、灯りに、光によって、唐紙はその表情を変えます。そんな襖紙は、建具という仕切りの美学で、暮らしを彩ってくれます。

畳縁。昔は地位や身分によって使える模様が限られていましたが、今はどんな柄も色も素材も自由自在に、和室を美しく仕上げるアクセントとしてデザイン出来ます。七宝、花菱、亀甲、青海波、籠目、麻の葉・・・。流水、雲、花などの自然や鳥などをモチーフに、伝統の文様や色は、アレンジされ、今の暮らしに溶け込みます。

衣服や焼き物など美術工芸品など、暮らしの中に幅広く描かれている伝統の文様。時代や宗教、地域や民族、さまざま違っても、ひとは文様に願いを託し、祈りを重ねてデザインし、身近においたのです。

西アジアの遊牧民によって生み出されてきた手織りのキリムの文様も、身近な自然や動物などをモチーフとして、直線的幾何学的。繁栄、豊穣、健康や安産など・・・様々な願いが込められた個性的な文様です。民族、時代、宗教は違っても、ひとの願いや祈りは、同じです。実際、日本の刺し子に使われた文様と、キリムの文様が、よく似たものがあること、不思議だけど納得できます。

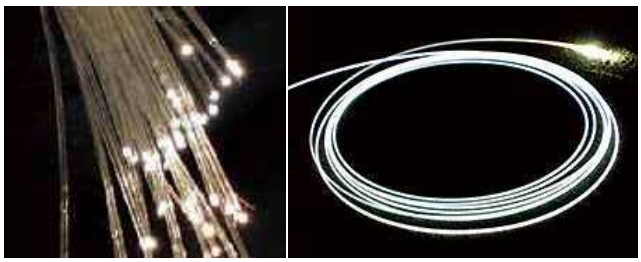
現代の襖紙は、襖だけにとどまらず、照明や衝立、壁や天井の仕上げ、家具の天板、絵額にまで、その使われ方を広げ、大胆に、静かに、粋に、その素材感、文様や色使いで、『しつらい』の感動の美を深くしてくれます。

光ファイバーの照明

宮地電機株式会社　田部 泉

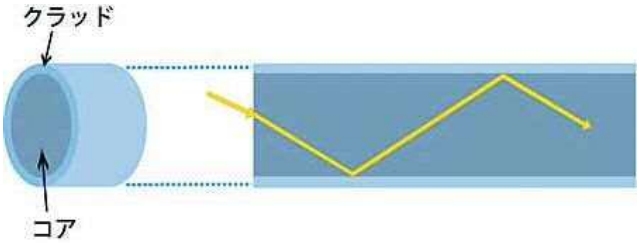
光ファイバーは漏電や発熱の心配がないため、噴水・プールなどの水中照明や、紫外線レスで美術館や博物館の冷熱照明に最適です。光ファイバーの素材を使った照明例を説明いたします。

■光ファイバー



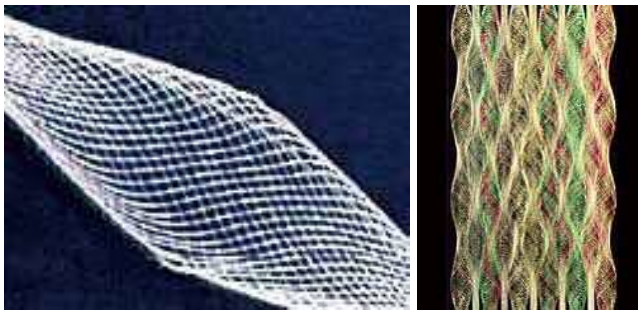
光ファイバーの構造は、コアと呼ばれる芯材とその外側のクラッドと呼ばれる鞘材との２層構造となっています。

■光ファイバーの構造



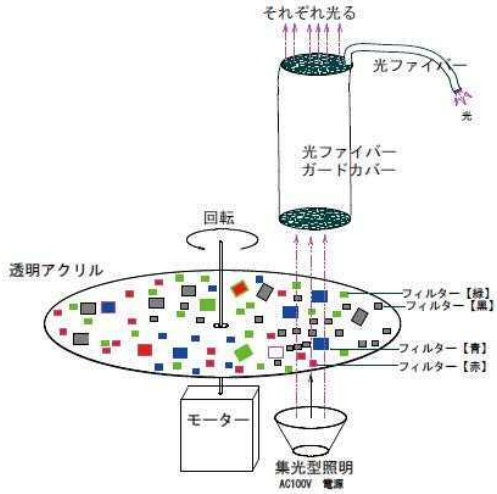
照明に活用する場合は、電源線などに比較して、・伝送帯域が広い　・外部から電磁誘導障害がない　・短絡事故がない　・軽量などの利点があります。光ファイバーを活用する方法は、１．側面発光型光ファイバーでビルなどの外周に取り付けて造形を際立てる。また、編んだ光ファイバーを並べて滝のイメージに仕立てて光の各色変化する演出ができます。

■編みのある側面発光型光ファイバー



２．端部から高輝度な光を活用する方法で星空天井照明が一般的ではないかと思います。浴室天井などには電気系統がないので防水に心配することもなく端部にクリスタルのアクリルや高価なスワロスキーを用いて輝度を高めた現場もあります。一番多いのは、端部を天井に仕込んで多数の天の川や流れ星を演出した星空天井照明が多く施工されています。

■光ファイバー原理



回転している透明アクリルにいろいろな色のフィルターを貼るとそれぞれの色がファイバーの端部から発光する。フィルターの大きさが光る時間の長さに比例する。
黒色のフィルターは、光を透過しないので、消えた状態になる。
小さくフィルターをすることで点滅の表現ができる。

■星空天井

星は少し煌めきながら色が変化し、流れ星は約 30 秒でそれぞれ４ヵ所から出現する演出をしている。

かいだん・階段

松山支部　玉乃井　公和

かいだん

この　うつくしい　いすに

いつも　空気が

こしかけて　います

そして　たのしそうに

算数を

かんがえて　います

これは、あの童謡「ぞうさん」でおなじみの詩人、まど.みちおさんの作品です。
この詩を初めて目にした時、「これは私達設計者が生み出すべき、“階段の素”となるものではないか」と、私には感じられたのでした。そして、それを何とか言葉にできないものかと。

この詩の中にある“階段の要素”は、「いす」と「空気」と「算数」だけですが、これだけでも階段の空間のイメージが湧いて来ます。そこにはピュアな「気」が「いつも」満ち満ちているようで、この「かいだん」からは、単に昇り降りするだけの階段ではない、心地好い空間が感じられます。さらにはそこには、言葉として現われていない、静謐な光さえも感じられます。

そして、何度も読み返している内に、この「いす」と「空気」と「算数」とが、一つに溶け合っているようにも“見えて”きます。形あるものと形なきものとが“かかわり”合って、「かいだん」という一つの空間.一つの世界がつくり出されている。そこに感じられるものは、それぞれの要素が、それぞれに等しく、「かいだん」を在らしめるための、かけがえのないものに“見えて”きます。
つまり、シンプルなこの要素のかかわり合いと、それらが融合した状態が“階段の素”となるものではないか、と一人合点の想像してみたのですが、それを実際の階段に「かたち」として現わすとなると、それは至難の技であろうということも又、すぐに想像できました。

この「かいだん」には「空気」という、目には見えない、そして普段は意識することのない、私達が生きて行く上での一番大事な要素が“主体”となって「こしかけて」いますが、もしかするとこの「空気」のところに、他のもの、例えば「子供たち」や「花」といった言葉を“代入”してみても、この詩は成り立つようにできているのではないか、と私には思えます。
（素人の無茶苦茶な解釈かも知れませんが。）

そこからさらに飛躍をして空想すれば、この「かいだん」の空間から、この地球上に在るありとしあらゆるものの“かかわりと融合”の有り様、或いはこの宇宙に在る、ありとしあらゆるものの“かかわりと融合”の有り様が、フラクタクル（自己相似形）に“見えて”くるようにも思えます。

つまりこの「かいだん」の詩の“かかわりと融合”を見つめる視点は、もしかすると、そのすべてのものがつくられた原点の、この世界の始まりの地点にあるのではないか。
或いは「山川草木悉有仏性」といった平等感のもとにあるのではないか、とさえ思えてきます。

ちょっとばかり勝手な飛躍をし過ぎたかも知れませんが、これが井の中の蛙の凡人が、精一杯に腹を膨らませて「かんがえて」みた、この「かいだん」からの空想です。
果たしてこの空想が、宝くじの一等が当たるくらいの確率で当たっているのかどうか。
ともあれこの詩は、読めば読むほどに、高く深い拡がりを見せて行くように、私には感じられます。

と、夢見心地のままで終わってしまっては、このコーナーは「夢」だけになってしまいますので、ここらで目を覚まして「現」の世界へと帰って、ではこの「かいだん」のような「うつくしい」「たのしそう」な階段を生み出すためにはどのようにすればいいのか、と「かんがえて」みれば、それには先に「かいだん」を空想したことと同じように、「階段」もまた空想するところから始めてみるのが“自然”な流れのように思えます。

ここからは住まいの階段の話になります。
階段は、住まいの中にあって玄関や廊下と同じく、外と内.部屋と部屋などをつなぐ、“つなぎの空間”としてあります。ただ、玄関や廊下などが水平的な移動.二次元的な移動であるのに対して階段は、上下の三次元的な移動.言わば“異次元的なつなぎの空間”.或いは“異次元との境界領域”としてある、と言えるかと思います。

そしてその移動には、玄関や廊下などの移動とは違って、身体的なストレスが伴います。
極言すれば、このシンドさが現の階段の特徴である、と言えるかも知れません。それゆえ、このシンドさを和らげることが出来ればちょっとだけ、まど.みちおさんの「かいだん」に近づくことが出来るのではないか、と思ったりします。

そのストレスを和らげるためには、階段の各寸法を身体にやさしい寸法にすることは当然のこととして、それと共に階段を昇り降りする人の心を和らげる設計もまた、求められるのだろうと思います。
では、その人の心を和らげる設計にはどのようなことが考えられるのかと言うと、それには階段を昇り降りする際に、人の視線が様々に抜けて行くようなことを「かんがえて」みることが、一つの方法としてあるのではないかと思います。
視線が抜けるということは、心もまた同時に抜けて行くことになる。つまり、人の気を心地好く散らせる、ということを「かんがえて」みればいいのではないかということです。

その気の散らせ方には、例えばトップライトなどの上方からの明るい光により、視線や心が自然に上の方へと誘われて行く。そこからは青空や流れる雲や雨などが見える。
それから中庭に大きく開かれた窓から見える、緑のゆらぎにフッと気を取られる。それらの自然に気を取られている内に、知らぬ間に階段を昇り降りしていた、といったことなどが考えられるのではないかと思います。

或いは、余裕があれば階段を少し広くして、そこに移動するという機能だけではない、別の用途を加えて、人の気分をあいまいにし、そこをまさに「こしかけて」「たのしそうに」「かんがえる」場、つまりは階段を“しばし佇む場”として設えてみる、といった方法も考えられるかと思います。
そのように、階段を単なる上下移動するだけの機能的なスペースとして捉えるのではなく、異次元をつなぐ心地好い「縁（かかわり.つながり.作用）の空間」として設えることが出来たならば、少しは「かいだん」らしくなってくるのではないかと思います。

まど.みちおさんの「かいだん」という詩に出会い、そこにあまりにもシンプルでうつくしい空間が感じられたものですから、それに勝手に触発されてつい、「階段のことを考えてみよう」などと思い付き、やっとの思いで言葉にしてみたのですが、この、まど．みちおさんの詩への私の空想、もしかしなくともその様相は、アリが人間の姿を云々しているような、夜郎自大以上のものがあるのかも知れません。

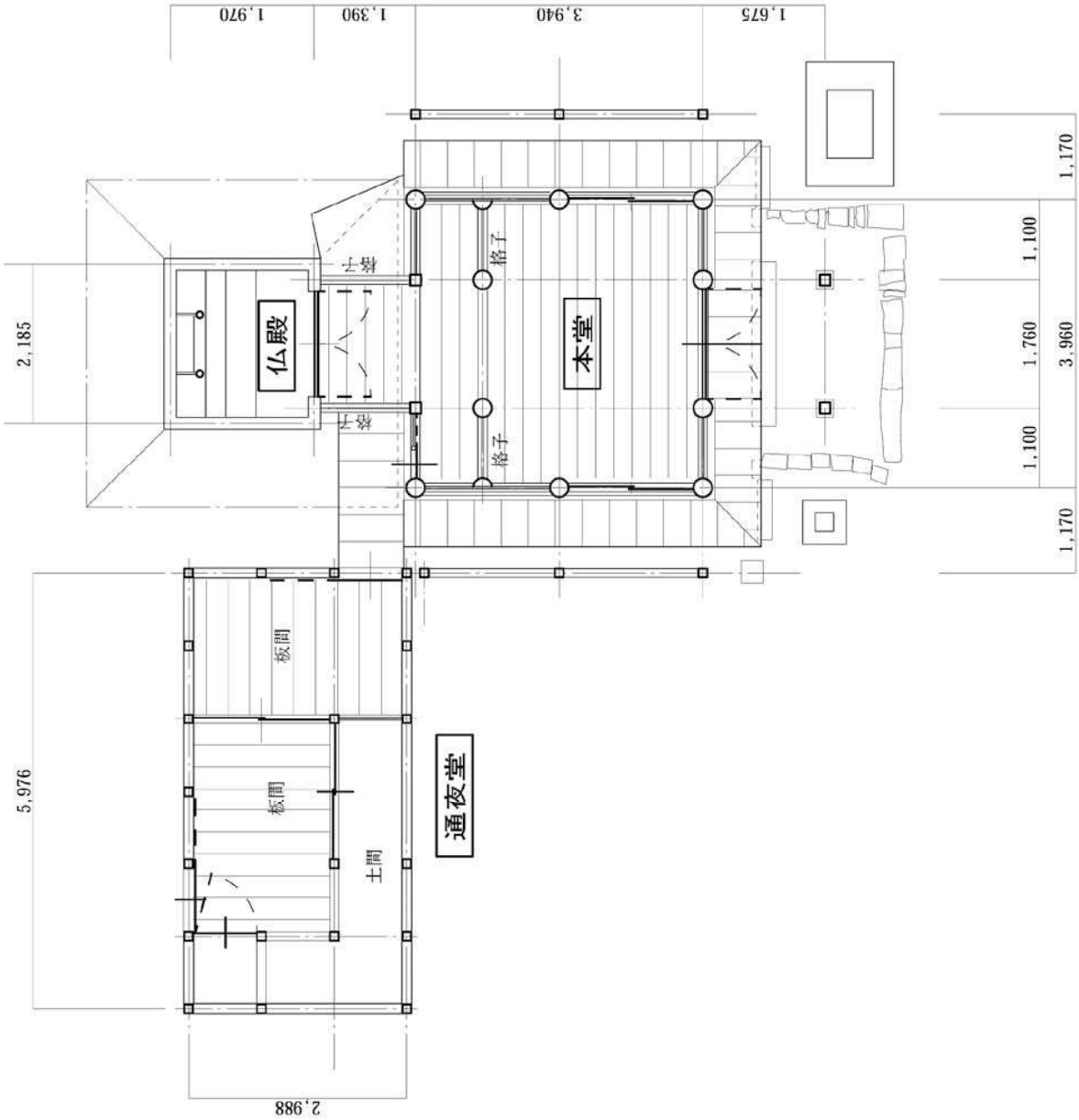
何れにしても、シンドイだけの階段はダメ！

牛ノ峯地蔵尊　文化財調査

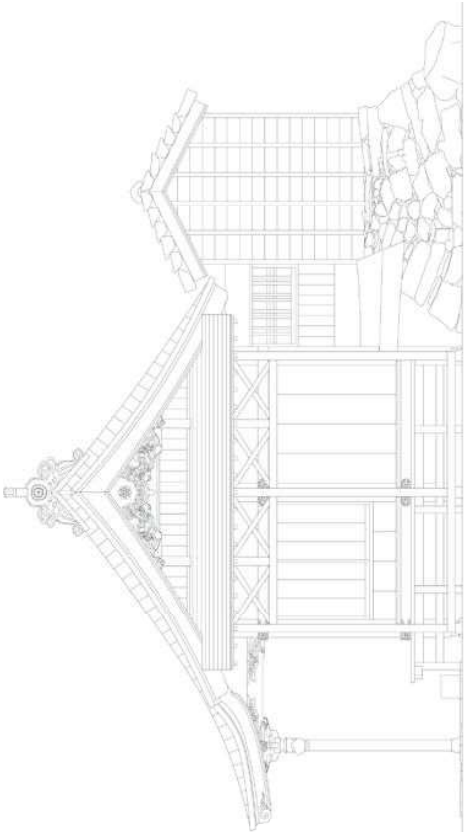
文化財・まちづくり委員会　副委員長　若松　一心

８月９日伊予市双海町において文化財の調査を行いました。２年前にも調査を行った建物ですが今回は伊予市教育委員会から調査報告書作成の依頼を受け、前回の調査内容に加えて、本堂の小屋裏等を調査し、新たな図面を作成し、まとめる事になりました。
以下は調査報告書に記載しました内容です。

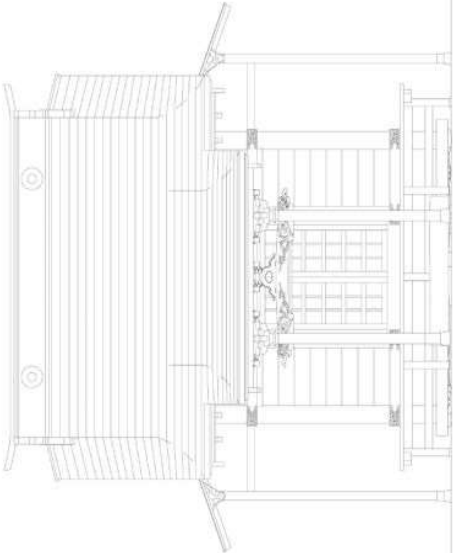
この建物は牛ノ峯山頂付近にある地蔵を祀る堂である。敷地には堂の他にも鐘撞堂、通夜堂（二棟）、芝居小屋がある。
文献から元文２年（1737 年）に創建された事が判る。
建物の配置は前側に本堂、後方に仏殿があり向拝が山を向くように配置されている。本堂の形状は正方形。屋根の形式は切妻造りで平入り。向拝部分のみ葺き下ろしている（縋破風付）。切妻造りには珍しく向拝を持つ。周囲には濡れ縁をめぐらしている。この濡れ縁は隣接する通夜堂とも接続されていて行き来が出来るようになっている。向拝柱は角柱、虹梁には、唐草の彫刻がある。この彫刻は形状を魚体にも見る事ができる。木鼻は象の彫刻、向拝虹梁上部に雲肘木付蟇股、本堂の柱は丸柱、壁は正面が横板壁、背面、側面は縦板壁、扉は板扉、窓は板窓、天井は竿縁天井、屋根は鋼板による一文字葺き、棟には妻側に鬼板（鳥衾付き）があり丸に桔梗の紋があしらわれている、懸魚は蕪懸魚（かぶらげぎょ）、左右の鰭（ひれ）は波の彫刻。
本堂に入り天井へ目を移すと仏殿に向けて内部虹梁が架かり、梁下には錫杖彫りがなされている。本堂と仏殿をつなぐ廊下への入口には来迎柱。三段を上がり仏殿に入る。
小屋組みについては特別の仕様はない。（現状は白蟻による被害が広範囲にあり、早急な補修が望まれる）。
仏殿は平成 24 年に以前の建物にならって改修された。石積みの上に土台が敷かれている。壁は柱材を連結して周囲に廻す壁柱となっている。仕上げは鎧板張り。屋根は花崗岩による石葺きの切妻造りである。
今回の調査で本堂の小屋裏に入り内部の損傷について確認できた事は、成果として大いに良かったと思います。本堂の外観は綺麗に見えるので、表から確認できる芝居小屋や通夜堂の老朽化に目を奪われていましたが、本堂も同等という事が判りました。状況は確認できましたが文化財保全という点では課題も多そうです。


1,675
3,940
1,390
1,970
1,170
1,100
1,760
1,100
1,170
3,960
格子
格子
格子
格子
本堂
仏殿
2,185
板間
板間
土間
通夜堂
5,976
2,988

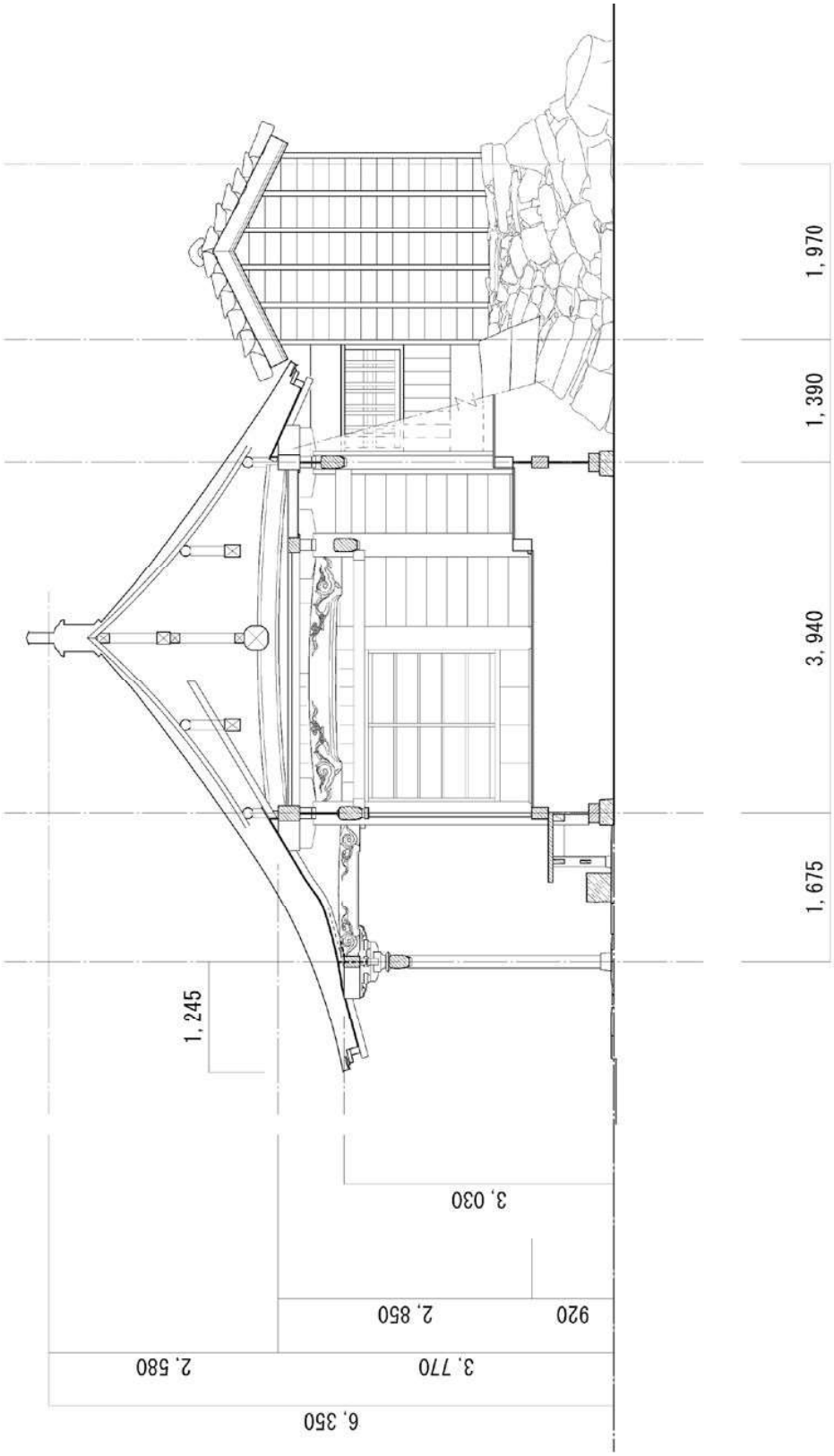
平面図



東立面図



南立面図



断面図

「雨いえ」「雨にわ」「雨まち」づくり

松山支部　近藤　岳志

雨水楽舎さんと女性委員会共催「建築と雨水活用の可能性」を考える連続セミナー【第１回】が７月２９日（水）に林業会館４階（中ホール）にて開催されました。

水みちデザイナー・法政大学兼任講師の神谷博先生をお招きし、「雨いえ」「雨にわ」「雨まち」づくりというテーマでお話して頂きました。

まず、「雨」は空から降ってくるものを人間や植物が「かりる」。そして、空に「かえす」という基本的なサイクルを続けていく形が重要というお話を頂きました。

神谷先生のご自宅で雨水活用に関わる実験の中で、500L 入るタンクの活用や、アースオーブンづくりについてお話頂き、様々な成功と失敗を繰り返されていました。

特に、雨にわを作る際に重要なのは、水を循環させることだそうです。その中で必要な装置としては、風車とソーラーのハイブリッド発電装置が効率的で、昼間はソーラーで発電しつつ、夜間は風車が発電してくれるというメリットがあるそうです。

国内・海外での雨水活用の事例紹介では、雨水産業で、実は日本よりもドイツの方が進んでいて、日本の優れた技術が雨水に関わる分野で活用されていないと実感しました。実は、ドイツの雨水関連商品の一部は日本の製品が入っているそうです。

「雨まちづくり」では、近年の法整備の中でグリーンインフラストラクチャー（社会資本整備や土地利用等のハード・ソフト両面において、自然が有する多様な機能（生物の生息場所の提供、良好な景観形成、気温上昇の抑制等）を活用し、持続可能で魅力ある国土づくりや地域づくりを進めるもの）が盛り込まれたそうです。その中で先進的なまちづくりが進められている世田谷で「世田谷ダム」として雨水活用できそうな対策をチェックし、実際に雨水の流出量を抑制しながら野川流域で「畜雨」できるような対策が進められていました。

最近の雨の降り方は、１時間１００mm 以上の雨が短時間で降り、河川の氾濫につながりかねない事例が多く発生していることもあり、初期の雨水をいかに自分の敷地内で留まらせられるかが重要になっていると実感しました。

セミナーの後は、千年和食銀次郎にて懇親会が開催されました。神谷先生、雨水楽舎のみなさま、松山市役所の方、建築士会メンバーが、雨水に限らず幅広い交流を行うことができました。

松山市では、雨水利用促進助成制度があり、事前に申請し、助成対象の雨水タンクを購入すれば助成金が出る可能性があります。詳しくは、松山市水資源対策課（市役所本館５階）にお問い合わせ下さい。渇水都市である松山で活動している建築士会としても、継続的に雨水活用に関わる勉強会に関わっていきたいと考えておりますので、今後もみなさまのセミナーご参加をお待ちしております。

（水みちデザイナー・法政大学兼任講師の神谷博先生）

私の思い出と今。

松山支部　河野　行信

長岡さんよりバトンをいただきました、河野です。

昨年度の入会で、まだまだ発展途上ですが、皆様からのご指導ご鞭撻をいただきながら、精一杯頑張りますのでよろしくお願いいたします。

私は、父の影響もあり建築を志し、関東の学校で建築を勉強した後、設計事務所に入社。たまたま一年目の配属先が地元愛媛になり帰郷、途中高知での２年間の勤務を含め、約6年間その事務所にお世話になりました。その後、家業を継ぐため今の会社に入社しました。建築の専門工事業その他をしておりますが、日々努力をしていなければ簡単に落ちていく、そんな厳しい業界なのだと改めて考えさせられる日々を送っております。終わり。少ない??・・・でしょうね。

なので、突然ですが、えぇ～と、今年、嬉しいお知らせがあって、それは・・・、な、なんと、サグラダファミリアが２０２６年に完成するらしいとのこと！

実は、約２０年前にある研修旅行で見学したことがあって、そのときはあと２００年くらい生きないと完成が見られんのかぁ～、と諦めていたのが、あと１１年！

で、そのときの研修旅行が私の建築に対する価値観を大きく変えた旅であり、先日大掃除をしていたとき、その旅程表や写真、日記を見つけたので、残りの行はそのことに触れさせていただきたいと思います。

縁あって参加したその研修旅行は、２３泊２４日という、今では決して出来ない長期（やっちゃうと何か大きな問題が発生すると思う。）で、ヨーロッパ方面の建築を勉強する真面目な（本当です。）ものでした。

旅程は、成田→アムステルダム→カイロ→ローマ→ナポリ→フィレンツェ→ベニス→ミラノ→インターラーケン→リヒテンシュタイン→ミュンヘン→ハイデルベルグ→フランクフルト→バルセロナ→パリ→アムステルダム→成田。

ピラミッド

アムステルダムの町並みに始まり、ピラミッド、パンティオン、コロッセオ、ポンペイ、ベッキオ橋、フィレンツェドゥオーモ、ピサの斜塔、現地ビアホール（?）、ＢＭＷ本社、ドイツ博物館、グエル公園、サグラダファミリア、カサ・バトリョ、ピカソ美術館、ヴェルサイユ宮殿、ルーブル美術館、エッフェル塔、ポンピドゥーセンター等々、お腹いっぱいの旅となりました。

エジプトではラクダに無理やり乗せられてお金をむしり取られたり、見たかったルツェルンのカペル橋が到着する１週間程前に火災で無残にも焼失していたり、パリで迷子になったり、大変な旅ではありましたが、今に比べてまだ感受性があったお年頃（?）の私にとって、様々な建築に触れることで、その建築に携わった当時の人たちの情熱を感じたり、学校の教科書では分からない新しい発見や感動がそこにあったりで、大変貴重な経験をすることが出来ました。今の仕事の礎になっているのは間違いありません。

サグラダファミリア

特に、サグラダファミリアに対してはそれまでは建築というより芸術に偏っているのかな、と思っていたのですが、実は、構造力学に基づいた安定性とストーリー性のある装飾に対する芸術性、この両面があることが分かり、感動がより大きかったのを覚えています。

で、日記を振り返ると、こんなことを書いていました。

「２４日間、日本を離れて異国の地で４０人（のツアーでした。）が一緒の生活し、仲間同士（志）、助け合い、励まし合い、喜びや感動を分かち合って、旅を続けてきたこと、そして、みんなで一つのことを一緒に感動できたことが良かった。」・・・まぁ、確かにっ！

建築士会に入会後、まだまだ活動歴は浅いですが、日記に書いたとおり、みんなで一つのことを一緒に感動できることが大好きな私にとって、建築士会の皆様と一緒に活動をさせていただき、一緒の感動を味わえることに、幸せを感じております。また、もっともっと建築業界の繁栄に対して何か出来ないかと考えるようになったのも、皆様のお陰と感謝しております。繰り返しになりますが、今後ともご指導ご鞭撻よろしくお願いいたします。

この度はこの「けんちくの輪」への投稿の機会をいただきましてありがとうございました。次にバトンをお渡しする一之瀬さん、よろしくお願いいたします。

エビアンを回し飲みした仲間たち

まちづくりに参加して

松山支部　永井　由起

近藤岳志さんからバトンを受け取りました、永井由起と申します。近藤さんには松山支部南地区でお世話になっています。

わたしは東京の大学で建築を学び、卒業後、アルバイト先だったアトリエ系設計事務所に就職、主に住宅を担当してきました。

建築士会に入会したのは４年程前です。結婚のため事務所を退職し、今治市の実家にいた頃でした。伝手もなく、一度も愛媛県内で仕事をしたことのないわたしとしてはアンテナを張ろうと思いました。「自分からアンテナを張っていれば欲しい情報、必要な情報を受信できる」という恩師の教えを実行したのです。

入会後、約半年は今治支部に所属。その間に今治支部の方と知り合う貴重な機会を頂きました。その後転居、松山支部に在籍し、現在は女性委員会の委員も仰せつかっています。

シンポジウムのチラシ

さて、松山支部に所属して半年後、平成24年から松山市の「松山駅周辺まちづくり審議会」の委員になり、２年の任期を務めました。JR松山駅周辺は全国の県庁所在地のJRの駅で最後の再開発になります。車両基地の移転に伴い、その跡地に建つ松山市の施設について審議しました。審議会では駅周辺に求められる機能、松山らしさをどのように表現するかなど、活発な意見がかわされました。「市内にある他の施設と連携しつつ、駅から大手町を抜けて中心部へと繋がっていく街のストーリーをデザインで表せたら良い」という提言が印象に残りました。

この春、審議会の意見やパブリックコメントを元に「松山駅周辺地区 車両基地跡地利用に関する基本構想」が公表されました（松山市のHPで公開中）。その施設に入ることが想定されるホールをテーマに、８月22日にシンポジウムが開かれました。審議会の委員としてパネリストとなり、会で出た意見や、一市民として新しく出来る施設に望むことについてお話しました。150人の定員を超える参加者があり、後になって建築士会の方も何人かいらしていたと伺いました。しかし、普段は人前で話す機会のないわたしはあまりの緊張で、どの方のお顔も全くわからないという有様でした。

市の施設については平成32年度の完成予定です。松山市だけでなく、県の顔ともなるJR松山駅周辺にぜひ関心を持っていただきたいと思います。

また、審議会のお仕事を頂いている間に、まちなか広場についてのワークショップにも参加する機会がありました。子供から高齢者まで幅広い年代を対象に、まちなかで滞在・滞留することを目的とし、賑わいの創生・まちづくり交流地点としての「みんなのひろば」で社会実験をしています（実験期間はH26年11月～H28年２月末）。運営は公・民・学の共同体である「アーバンデザインセンター松山（UDCM）」です。「銀天街GET」（旧ダイエー）の東側の道を千舟町通り方面に進むと見えてきます。

みんなのひろば（愛媛朝日テレビのニュースより）

ワークショップでの意見を元にベンチ（ワークショップ有志も製作）、井戸水を利用した噴水や手押しポンプの設置、空き地に必須アイテムの土管、緩い傾斜の丘など「あったらいいな」が実現した広場になりました。ひろばの芝生をはるのも市民有志によるものでした。当日テレビの取材があり、一生懸命芝生を叩き込んでいたら声をかけられ、うっかりインタビューに答えたら放送されてしまったのも良い（？）思い出です。

テレビに映ってしまった筆者

これまでに、ひろばでは噴水を利用したまちなかプールの設置や映画の上映会などが、また、ひろばを運営するUDCMでもいろいろなイベントが行われてきました。これからも様々な企画が検討されています。是非一度、と言わず何度でも！足を運んでみてください。

最後になりますが、建築士会の沢山の活動を通じて多くの方と知り合うことが出来ました。自分からアンテナを張ったからこそ、みなさんのアンテナと関わることが出来て今の交流があると感じます。恩師の言葉に感謝しつつ、まだまだアンテナの張り具合が足りないと自覚している今日この頃です。今後ともよろしくお願いします。

次号のバトンはわたしの唐突なお願いにも関わらず、快くお引受け下さった素敵な方です。お楽しみに！

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

四国中央支部

行事等の名称	紙まつりバザー
日　　時	平成 27 年 7 月 25 日
場　　所	四国中央市川之江町栄町商店街
対象者	紙まつり参加者及び観客
参加者数	11 名

活動の内容と成果

第 28 回目を迎えた「紙まつり」は、7 月 25 日、川之江町栄町商店街において紙製品を中心に数多くの出店が立ち並び、多数の親子連れ等で賑わった。
建築士会四国中央支部も、一角にブースを構え、無料住宅相談会の看板を掲げ、耐震工事の助成金の申請方法、建築士による耐震診断の仕組み等を説明した。
子供連れの人達にも気軽に立ち寄ってもらうため、ペーパークラフトを用意し、住宅の模型の色付けや組み立てを子供に作ってもらった。
また、家の断面図的な紙の模型を用意し、筋交いを入れることにより耐震強度が増すことを子供たちにも実感してもらった。一日で約 40 人の来客があった。

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

新居浜支部・西条支部

行事等の名称	家づくり　なんでも無料相談
日　　時	平成 27 年 7 月 4、5 日
場　　所	イオンホール（イオンモール新居浜内）
対象者	一般市民
参加者数	来場者約 800 名

活動の内容と成果

建築士による建築無料相談
新居浜市による木造住宅耐震相談
建築士による実施工パネル展示、園児によるお絵かき展示、左官体験、バルーンアート
板金折鶴実演

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

周桑支部

行事等の名称	丹原七夕祭 in 耐震診断・耐震改修アピール活動
日　　時	平成 27 年８月５日（水）　PM 6:00 ～PM 9:40
場　　所	丹原町伊予銀行駐車場
対象者	盆踊り出場者及び観客
参加者数	行事活動参加者　８人

活動の内容と成果

※西条市建築審査課と共同して、耐震診断・耐震改修のチラシとティッシュを配布した。
初めての場所で、電源等の段取りに手間取ったが、なんとか時間に間に合いました。
七夕祭りは地元の盆踊りのグループが多数参加して盛大に盛り上がりました。
隣が大会本部席、目の前が休息スペースで長椅子も沢山用意されており、見物の観客が列をなしてかき氷を買ってくれます。作る方は本当に休みなしでした。
隣の射的も子供に大うけで、余興のイベントに熱が入り、メインの耐震診断・耐震改修のアピール活動が、ついついおろそかになってしまいました。
これも一夜の祭りの出来事としておゆるし下さい。住民の喜ぶ姿を見るのが一番ですね。

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

周桑支部

行事等の名称	夏彩祭 in 耐震診断・耐震改修アピール活動
日　　時	平成 27 年８月 23 日（日）　AM 10:00 ～ PM 3:00
場　　所	壬生川伊予銀前通り
対象者	イベント出場者及び観客
参加者数	行事活動参加者　１０人

活動の内容と成果

＊　伊予銀通りを歩行者天国にしての各種イベントの一環として、耐震診断・耐震改修のアピール活動（パンフレット配布）を西条市建築審査課と共同で実施した。
＊　客寄せの一環として、かき氷の販売と射的のイベントを行なった。

今年もメインステージの二つ横という、恵まれた場所でイベントを行う事ができました。
午前中は、隣の周桑宅建協会の「うなぎのつかみどり」と「炭焼き蒲焼」に客が集まり長蛇の列ができ、アスファルトの暑さも助けとなって、かき氷も順調にすべりだしをしたのですが、隣のイベントも昼には終了し（うなぎの高騰が大いに影響している。）午後のメインイベントであるレーモンド松屋ライブが始まると、客足がピタッと止ってしまいました。
考えてみると、建築士会のブースがいつの間にか、イベント会場の一番北になっておりおまけに、今年の来客用駐車場は東と南に位置するので、人が流れてこないはずです。
おかげでゆっくりライブを聞くことが出来ました。
西条市建築審査課の、耐震診断・耐震改修のチラシとティッシュの配布も客が寄ってこないと成果があがりません。　残念！残念！！ですが事業の実施はこれからです。
西条市での 耐震診断・耐震改修事業が、今後も順調に進展することを願っています。
周桑支部は、来年４月に西条支部と合併しますが、イベント事業は引き続き継続します。
来年も 「　おいでや　　あそぼや　　まちよるけん～　」 建築士会　周桑支部でした。

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

今治支部

行事等の名称	おかしのまちをつくろう！
日　　時	平成 27 年 7 月 25 日
場　　所	今治市中央住民センター２階　栄養指導室
対象者	今治市内の小中学生
参加者数	小中学生とその保護者等 合計 -58 名

活動の内容と成果

一昨年、昨年好評だった「おかしのまち」づくりのイベント。今年も引き続き開催しました。
今回は定員の２倍以上の応募があり、抽選を行い 37 名のお子さんとその保護者に参加していただきました。
また今回から講師、おかいのいえのベースを無くし、全て市販のおかしを使って自分たちで製作しました。
試行錯誤しながらも、個性豊かな作品たちで今年も素敵な「おかしのまち」ができあがりました。

お子さんにも保護者の方々にも大好評で来年もぜひ参加したいという声を多数いただきました。
このイベントを通じて、引き続き、建築・まち・モノづくりの楽しさを伝えていきたいです。

おかしの建築士の認定書を渡し、最後に全員集合して記念撮影。
将来の夢は、もちろん「け～んちくし～＼ (^o^) ／」

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

松山支部

行事等の名称	建築巡礼 in まつやまⅦ
日　　時	平成 27 年 7 月 11 日
場　　所	松山市～旧北条市～今治市
対象者	一般市民
参加者数	一般市民 32 名　スタッフ 22 名

活動の内容と成果

松山支部公益事業「建築士の日」行事として今年も建築物を観て解説し巡回する建築巡礼の第７回を７月 11 日（土）に開催しました。従前のバスツアーを企画し愛媛新聞社の後援とパンフレットに依る公募で 60 名を超える参加希望者のうち抽選で定員 32 名の一般参加者を選定しスタッフ 22 名総勢 56 名での開催となりました。

今年は、松山市～旧北条市～今治市まで足を延ばして見学しました。例年のとおり松山市駅集合、天候の心配もなく定刻に出発し、まず松山市内の見学地三浦美術館「ミウラート・ヴィレッジ」では説明担当の和田青年委員より、館の設計者建築家長谷川逸子さんの設計コンセプトや松山市内での長谷川さんの作品例また美術館建築主三浦工業創業者、三浦保氏の陶芸・美術品との関わりなどについて解説が有り、暫く美術館の展示を見学のあと、次の見学地である旧北条市八反地「国津比古命神社楼門」（くにつひこのみこと）へ移動しこの神社は参道真西に鹿島が見える八反地集落の東の丘陵に位置し、神社の楼門は松山市味酒町の阿沼美神社に建てられたものであり元禄年間に移築したものであることについて近藤青年委員の「紙芝居」を用いた建築用語について解説や現物にて桁行３間・梁間２間・八脚門（けたゆき３けん・はりま２けん・八つあしもん）の数え方や小屋組の組物や彫刻などの説明を受け、大変わかり易りやすかったと思います。

移動の車中では、このあと見学する今治市役所建物の建設に携わった大崎委員より当時の現場の様子や工事での苦労話しを聞くことが出来、大変参考になったと思います。今治市別宮町に建つ四国霊場第 55 番札所「南光坊」では久保･峰岡両青年委員により大師堂について、長州（山口県）大工との関わり、蟇股（かえるまた）の大きさ・屋根の上に載っている露盤宝珠が日本で最大級である事などの解説がありました。昼食を済ませ、今治市出身の建築家丹下健三先生の市役所敷地内三作品について中央広場から見渡しながら、まず今治市民会館について和泉青年委員より、今治市庁舎について井上青年委員より、今治市公会堂は大西（慶）青年委員よりのそれぞれの解説があり丹下先生の生い立ちから建築家になろうとした経緯、今治市への想入れ、市庁舎の日照調整と構造的なスパンの問題を解決した結果がひとつの表現となっていること、コンクリート打放しも表現のひとつであり将来への可能性を表していること等、広場を取り囲むそれぞれの建物のテーマが披露されました。最後に今治城跡の概要については大塚女性委員より、再建された天守閣についての経緯、石垣の石のことなどこの城の立地条件について海水の入った堀（内堀）を眺めながら、また再建された大手門へ移動しながら解説をうけ、城を後に帰りの途に着きました。暑い一日でしたが参加された方は有意義な一日を過ごすことが出来ました。各地での説明担当スタッフの事前下見やら、行事に関わった支部会員の手配・資料準備が万全で、今年の巡礼も成功裏に終えることができたのではないかと思います。

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

伊予支部

行事等の名称	市民と建築士が連携し安全・安心なまちづくり
日　　時	平成 27 年 7 月 26 日
場　　所	伊予市灘町（山惣商店横・旧朝日生命ビル横）
対象者	一般市民
参加者数	９名

活動の内容と成果

伊予支部は「建築士会の日」の行事として、昨年に続き、「東南海・南海地震」に対する啓蒙と災害に強いまちづくりを推進するため、「木造耐震診断」と「木造耐震改修工事」の費用の一部を伊予市が負担する内容と建築士会伊予支部の名前を印刷した「うちわ」を「伊予彩まつり」の会場で市民の皆さんに配布しました。今年も天候に恵まれ、多くの市民の皆さんが会場に集まって来られ、用意した「うちわ」はすぐに配り切ました。この「うちわ」に印刷した内容を市民の皆さんが読んで少しでも建築士と地震に関心を持っていただくことが出来ればいいなと思います。
今年は建築士のＰＲの為､新たに中山町の「ほたる祭り」の会場でも「うちわ」を配布し､とても好評でした。去年も行ったのですが９月には双海町の下灘駅で開催されるコンサートの会場でも「うちわ」を配布し、建築士のＰＲと地震にたいする啓蒙を行う予定です。
今年も多くの伊予支部の青年部の皆さんが参加してくれました。

←ほたる祭り

↓伊予彩祭り

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

大洲支部

行事等の名称	耐震診断・耐震補強啓発活動
日　　時	平成 27 年７月 19 日
場　　所	大洲市東大洲　DCM ダイキ店頭
対象者	一般市民
参加者数	50 名

活動の内容と成果

７月 19 日　大洲市東大洲　新店舗となった DCM ダイキ大洲店店頭にて耐震診断・耐震補強啓発活動を行いました。当日は小雨の中、建築士会会員８名と大洲市都市整備課より３名の参加です。大洲市より提供されましたパンフレット１０００枚をポケットテッシュと共に近くのオズメッセにて配布しました。１０時より大洲市消防署の協力で起震車を設置し、１２時までに５０名以上の方々が東日本大震災時の揺れを体験しました。体験者には“たまご１パック“をサービスしています。
実際の激しい揺れを体験すると地震の恐怖を十分に感じていただいたようです。
今回はダイキ大洲店の全面的な協力をいただき、関連したイベントも行われていました。

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

八幡浜支部

行事等の名称	無料建築相談、「建築士の日」街頭アピール団扇配り、ゲーム大会
日　　時	平成 27 年 7 月 18 日
場　　所	新町ドーム（八幡浜新町アーケード内）
対象者	土曜夜市一般通行人
参加者数	8名

活動の内容と成果

八幡浜支部は、「建築士の日」を街頭にてアピールするため、ロゴ入りの団扇配布、ゲーム大会、建築無料相談会を開催しました。毎年恒例となったゲーム大会では、手馴れた子供達の満足した顔、初めて金槌を持ち不安ながら楽しそうな顔など、未来の建築業界を支える建築士・大工の良い笑顔を見ることが出来ました。今年度もケガする子供も無く、親子共々楽しんで頂きました。

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

西予支部

行事等の名称	西予ジオパーク研修会（“山”の部）
日　　時	平成 27 年９月 19 日
場　　所	西予市　野村町～城川町
対象者	支部会員・一般
参加者数	15 名（会員 ×10、一般 ×5　内、子供３名）

活動の内容と成果

西予市の“ジオパーク”認定を受け、西予支部では「西予ジオパーク研修会」を開催しました。
昨年は、[“海”の部] を行い、盛況でした。
本年は、[“山”の部] を挙行しました。

大野ヶ原（源氏ケ駄馬）にて

土居家　見学

ブナ原生林

穴神鍾乳洞にて、説明会

鍾乳洞　散策

平成 27 年度『建築士の日』行事実施報告書

宇和島支部

行事等の名称	2015　夢のまち・素敵なまち絵画展
日　　時	平成 27 年７月４日（土）
場　　所	新橋通り銀天街（宇和島きさいやロード）
対象者	作品募集　市内小学校 4･5･6 年生　絵画展　一般公開
参加者数	応募作品数　174 点　来場者　約 1,500 人

活動の内容と成果

建築士の日にちなみ､絵画制作を通して子供達に建築に対する親しみを持って貰う目的で開始した絵画展も、今年で記念すべき 20 回目となりました。
今年の応募数は 174 点で、例年通り、宇和島しんばし商店街で展示会を行いました。
今年は、小学５年生に力強い作品が集まり、来場者の目を引きました。

７月１日小学校の先生の協力のもと審査を行いました。
支部長賞をはじめ、合計 15 点の入賞作品を小学校の先生の協力のもと選びました。
商店街が実施している土曜夜市の中で展示を行い、多くの皆さんに作品を見て頂きました。

今年は台風の関係で、終業式が急遽早く行われた為、表彰式は残念ながら行われませんでした。

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、広く異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしていきます。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年６回発行となります。
（尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承下さい。）

「いしづち」の本年度の原稿締切日
平成 28 年　１月号（108 号）　平成 27 年 11 月 19 日㈭

※ 校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。
※ １ページ写真込みで 2150 文字（25 文字 ×43 行 × 横２段）の WORD 様式を事務局で用意していますのでご活用ください。
写真は１ページ当たり５枚程度まで題名を付けて添付してください。
また宜しければ投稿者の写真（免許写真程度の顔写真）を添付してください。
会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。
（尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかも知れませんので、予めご了承下さい。）
この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にまで、建築についての対話等の輪が広がれば、と願っています。

情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せ下さい。お待ちしています。

「いしづち」編集委員会（士会事務局内）宛
― FAX 948-0061 ―

編集後記

この「いしづち」のタイトルの“色決め”は、私が若い頃に仕上げの色決めをするために買っていた大日本インキの、「日本の伝統色」の中から選んでいます。９月号は紺色、そして 11 月号は朱色ですが、これはどちらもその月の誕生色だそうで、今号ではそれがちょうど道後温泉の窓の色にうまく合ったようです。

私はこの「日本の伝統色」の他にも「中国の伝統色」と、あと３種類くらいの“色見本帖”を買っていたのですが、ある時期からはあまり色にこだわりを持たなくなり、殆んどお役御免になっていたものを、今「いしづち」の表紙で懐かしく使っています。

青春．朱夏．白秋．玄冬と、季節にも人生にも色がある。
もしかすると、色にこだわりを持たなくなった時期は、人生の白い季節にさしかかった時期と合致するのではないか、などとこれは単なるこじつけ。　（玉乃井　公和）

本誌の表紙の版画を提供して頂いております、山田きよ氏の版画展が今年も下記の日程で開催されます。実物には、プリントにはない美しさがあります。尚、版画展の会場にはこの「いしづち」も展示させて頂くことになりましたので、ぜひご覧下さい。

[山田きよ版画展]
平成 27 年 11 月 23 日（月）～ 29 日（日）　山荘画廊（大洲市大洲）

〈いしづち〉2015 ／ 11
平成 27 年 11 月発行
発行人　**会長　寺尾　保仁**
発行所　**公益社団法人　愛媛県建築士会**
〒790-0002　松山市二番町四丁目1-5
TEL（089）945-6100　FAX（089）948-0061
http：//www.ehime-shikai.com　E-mail：info@ehime-shikai.com
印刷所　明星印刷工業株式会社
情報・広報委員会・広報委員
委 員 長　玉乃井公和　副委員長　大上　恵子
編集委員　二宮　初子　宮内　理　越智　麻衣　石丸真智子　小笠原　元　水野日出夫